

日本旧石器学会  
ニュースレター 第26号  
NEWS LETTER No.26  
JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



## Paleoamerican Odyssey 参加記 / Santa Fe, New Mexico, USA

平澤 悠（慶應義塾大学文学研究科 後期博士課程）

Center for the Study of First American, Texas A&M University 主催の『Paleoamerican Odyssey』（以下 PAO と表記する）が、2013 年 10 月 16 日から 19 日までの計 4 日間、アメリカ合衆国ニューメキシコ州サンタフェにて開催された。

アメリカ大陸への人類集団移動論は、その時期、ルート、石器製作技術、絶滅大型動物との関係性、古環境変動との関係など学際的で多様な研究が 20 世紀初頭から行われてきた。1999 年にもファーストアメリカン研究者らが一堂に会した『Clovis and Beyond』会議が行われたが、それから 14 年が経過した現在、分子遺伝学や水中考古学の応用など新たな研究手法も試みられている。主にシベリアからアメリカ大陸全土が地理的な対象となるファーストアメリカン研究のフィールドには、今なお踏査が困難な場所も少なくない。そして地域の個別な研究は必ずしも常に共有されるわけではない。こうした状況下、過去 14 年間で各地において進められた、研究成果や新たな発見が報告され、後期更新世に新大陸へ移住した人類集団の文化的・遺伝的来歴も学際的に議論された本会議の意義は大きい。

事務局の発表によれば、本会議には 17 の国籍をもつ 1130 人が参加、うち合衆国以外からの国籍をもつ者は 71 名を数えた。また有職の考古学者、院生・学部生は全参加者の 46% を占め、その所属先は 140 の大学と 53 の博物館、さらに 11 の政府機関と 37 の民間企業にも及んだ。こうしてみると、ホモ・サピエンスの新大陸への拡散過程に関心を抱く研究者が多いことがわかる。日本からは出穂雅実氏、橋詰潤氏、岩瀬彬氏、大谷薫氏および筆者が参加し、出穂氏が口頭発表、橋詰氏と岩瀬氏がそれぞれポスター発表を行った。

4 日間のカンファレンスは、49 件の口頭発表と 192 件のポスター発表によって構成された。紙面の

都合上すべての発表について言及することはできないが、本稿では以下、口頭発表が行われたシンポジウムを中心にその概要を報告する。

メインシンポジウムは 6 つ行われ、参加者の要望で設定された追加のシンポジウムが 2 つ夜間に行われた。メインシンポジウムの各タイトルは 1: Greater Beringia、2: Routes and Process of Dispersal、3: Clovis、4: Clovis Contemporaries、5: Archaeology of Pre-Clovis I、6: Archaeology of Pre-Clovis II、となっている。

シンポジウム 1: Greater Beringia では、5 人がシベリア、日本、アラスカの旧石器研究の具体的な事例を用いて発表を行った。

K. E. Graf は人類の北極圏への拡散時期を明らかにすることを目的に、シベリアにおける上部旧石器時代遺跡の年代を前・中・後期に三分区。それぞれの石器製作技術、遺構、出土動物遺存体に触れ、各期の特徴をまとめた。

出穂雅実氏は北海道出土の LGM 期石器群の石器



写真1 会場入り口のウェルカムサイン

製作技術を豊富なデータを用いて整理した。当時のサハリン・北海道・クリル半島を含む地域の地理、古環境、植生をまとめ、各遺跡における年代値の精査と、石器製作技術の分析を通して、遺跡間における出土様相の違いについて具体的に言及した。

B. A. Potter らは、アラスカ内陸部の3遺跡を中心とした技術的組織論を展開した。出土石器群を単に旧大陸資料群と比較することとどまらず、豊富な動物遺存体資料をも有効活用する彼らの研究からは、アラスカにおける旧石器文化研究が詳細な地域研究へと移行しつつある様子も窺えた。

シンポジウム2: Routes and Process of Dispersal では、J. W. Ives and Duane Froese が無氷回廊、J. M. Erlandson と Q. Mackie らが海岸ルート、D. Stanford らが大西洋ルートに関連した発表を行った。特に興味深かったのは、Mackie らの水中考古学的方法を用いた北西海岸 Kilgii Gwaay 遺跡の研究であった。周知の通り Fladmark (1979) によって提唱された海岸ルート説は、海水準の上昇によって水没した遺跡について言及が不可能である点に弱点を抱えていた。こうした背景のもと、Mackie らは水没遺跡を発見するために 10,700 cal BP 当時の海岸線を決定し、そこから 10m ほど陸側を調査している。発掘区出土遺物の AMS 年代測定では海岸線の形成年代とほぼ一致しており、魚類やラッコなどの海獣類骨も多く出土していることから積極的な海洋資源利用が示唆される (Mackie et al. 2013)。水中考古学の 10,000 cal BP を遡る遺跡調査への応用は、今後 LGM 期の海水準最大低下時の遺跡分布調査および発掘調査の可能性を期待させる。

シンポジウム3: Clovis では、6本の Clovis 石器群に関連する発表があった。

J. P. Kennet らは Pinter et al.(2011) によって完全に否定された Clovis Comet 説を、再び新たなデータと共に主張した。

N. M. Waguespack は、著名な Martin(1967) の電撃戦モデルに代表される大型哺乳類絶滅の原因について、狩猟圧による絶滅説を支持する立場から議論した。彼女は 14,000 cal BP から 12,800 cal BP までの人類と大型哺乳類が同時に北米で存在していた期間を、さらに細かな時間幅で検証することが必要であると説いた。現在では古環境変動による大型哺乳類生息環境の減少が、絶滅に拍車をかけたとする説が支持を集めているものの、更新世末期における大型

動物の絶滅要因に関しては、未だ論争の決着をみていない。ハイブリッドモデルの想定が妥当であるとも考えられるが、Waguespack の主張では過去に否定された議論を最新のデータを用いて細かに再検証することを求めているのだろう。

これら隕石衝突によるヤンガードライアス期の到来、Clovis 石器群の消滅、大型哺乳類の絶滅に関する議論は夜間に別セッションで引き続き議論された。

Clovis Contemporaries と題されたシンポジウム4では、Clovis とほぼ同時期と考えられる中南米の遺跡と資料を主題とする7つの発表で構成された。1988年に約13,000 BPを遡る長期居住遺跡である Monte Verde 遺跡を発見した T. D. Dillehay は、現在までに南アメリカで発見された石器群と、遺跡を形成した集団の環境適応について詳細な検討を行った (Dillehay and Collins 1988)。彼は1980年代以降多くの遺跡が発見されたことで、少なくとも12,000 <sup>14</sup>C BPにはチリ南端まで人類が拡散しており、北米とは異なる石器群と居住形態を持つとみた。そのことを踏まえ、彼は、D. Stanford や B. Bradley が提唱する大西洋モデル (Stanford and Bradley 2012)、Fladmark (1979) や Erlandson (2013) が支持する海岸移動ルートモデルに対しての科学的な証拠と論拠に基づいた批判がなされていないにも関わらず、Clovis First Model が未だに支持されていることに対して大きな疑問を感じていると主張した (Dillehay 2013)。

シンポジウム5と6はPre-Clovis I・IIと題され、Clovis 石器群が現れる13,500 cal BP以前の年代を持つ石器群に関連する発表が合わせて11の発表で構成された。Pre-Clovisの発表全体を通して重要視されていたのはやはり年代測定値、そして石器か偽石器かの判別基準であった。例えば E.Boëda はブラジル北東部の Vale da Pedra Durada 遺跡、Tira Peia 遺跡、Sitio do Meio 遺跡から OSL 年代測定で20,000 BPを遡る石英製の礫石器および剥片石器が出土すると報告した。これらの石器は同地域の新しい文化層からは検出されないことから、技術の後続については判断できないが、韓国で出土する40,000～25,000 BPの石器と形態的に類似すると述べている。

他方、W. Anderfsky, Jr. は人工的な剥片か偽石器かを見分ける為の実験と、その結果から得られた分類方法を細かに提唱し、Pre-Clovis 期に属する石器

と判定する基準を提示した。

最後に M. R. Waters と T. W. Stafford, Jr. は Clovis、Pre-Clovis という用語が何を示すのかをもう一度問い直すことによって、それぞれの用語が持つ文化的、編年的な意味を再確認した。信頼しうる年代値の比較後に Pre-Clovis とは Exploration Period であり、槓状剥離を持つポイントなどの特徴的な製品を石器組成中に持たない可能性が高いことを示唆している (Waters and Stafford 2013)。

口頭発表、ポスター発表に加え、北米を中心とした 60 遺跡以上の出土遺物が展示された。日本からは出穂氏により上幌内モイ遺跡、雄勝嘉藤 2 遺跡、嶋木遺跡、ルベの沢遺跡、オバルベツ 2 遺跡の資料が展示され、北海道の旧石器時代石器群が世界各国の研究者の目に触れることとなった。北米の遺跡では著名なメドウクロフト岩陰遺跡、マニス遺跡、トッパー遺跡、カクタスヒル遺跡の資料なども一堂に展示された。

会議全体を通して筆者が感じたのは、すでに多くの Pre-Clovis 期の遺跡が確認されているにも関わらず、未だ Clovis First Model から脱却できない状況があり、それに対する批判を行う研究が多く存在することにほかならない。いずれの移住・拡散モデルもまだ確証を欠くが、Dillehay (2013) や Waters ら (2013) が指摘する通り、前回の『Clovis and Beyond』から 14 年が経過した今、ファーストアメリカン研究は新たな局面にさしかかっているとと言えるのではなかろうか。

現在アメリカの旧石器研究者らは、アラスカ州内陸部の Swan Point 遺跡から出土する湧別技法により製作された細石刃核や、カリフォルニア沖で出土する縄文草創期の有茎尖頭器に類似した石器に強く興味を示しており、日本の更新世末期の考古学的研



写真 2 遺物展示会場風景

究がファーストアメリカン論に大きく寄与する可能性がある。前者の細石刃石器群は、アラスカ内陸部で一度途絶えるが、完新世初頭に再び剥片素材の細石刃核を中心にカナダのアルバータ州まで広がっていく。こうした特定の石器の消長と技術の変化が、気候変動と移動のプロセスの中で起こることは他地域でも一般的にみられる。このことからアラスカの細石刃石器群研究は、単なる地域研究に留まらず、北方圏における人類の適応行動に関する重要な事例研究とみなすことができる。アメリカ旧石器研究の主題ともいえる新大陸への移動経路・移動時期に関する議論に今求められているのは、石器製作技術に変化を促した主因を論じることであろう。

本会議では、朝 8 時から夜 9 時まで様々なプログラムが催され、非常に濃密なアメリカ考古学を学ぶ時間であった。毎晩カンファレンス終了後には、美しいサンタフェ市街で、ニューメキシカン料理や地ビールを楽しみながら若手研究者らと様々な情報交換ができた。広域を対象としたファーストアメリカンに関する本学術会議が次に開催されるのは、10 年以上を経た後となるだろうが、各地域の詳細な研究の進展と、ファーストアメリカン研究の成果を共有する機会がさらに増えることに期待したい。

なお、本小稿において引用した Dillehay, T. D. (2013)、Erlandson, J. M. (2013)、Mackie et al. (2013)、Waters, M. R. and Stafford, T. W. Jr. (2013) の各論考は PAO 会議に合わせて刊行された『Paleoamerican Odyssey』に所収されていることを書き添えておく。

#### 引用文献

- Dillehay, T. D., and Collins, M. B. (1988) Early Cultural Evidence from Monte Verde in Chile. *Nature* 332: 150-152.
- Fladmark, K. R. (1979) Routes: Alternative Migration Corridors for Early Man in North America, *American Antiquity* 44: 55-69.
- Martin, P. S. (1967) Pleistocene Overkill. *Natural History* 76: 32-38.
- Pinter, N., Scott, A. C., Daulton, T. L., Podoll, A., Koeberl, C., Anderson, R. S., and Ishman, S. E. (2011) The Younger Dryas Impact Hypothesis: A Requiem. *Earth-Science Reviews* 106 (3-4): 247-264.
- Stanford, D., and Bradley, B. A. (2012) *Across Atlantic Ice*. University of California Press, Berkeley.

## 役員選挙結果のお知らせ

先の2014年3月1日～20日に郵送で行われた、次期日本旧石器学会役員選挙の投票に関し、開票作業を3月29日に行いました。集計の結果を下記のとおり報告します。なお、今回の選挙当選者は本年6月に開催予定の次期総会で承認を受けた後、次期役員となる予定です。

1. 場所：神奈川県横浜市内
2. 日時：2014年3月29日 9時～10時30分
3. 開票作業：栗原伸好（選挙管理委員長）、井関文明（選挙管理委員）、伊藤 健（総務委員長）
4. 投票数
  - 1) 郵送投票枚数 87票
  - 2) 郵送有効投票枚数 87票
  - 3) 投票数 845票
  - 4) 有効投票数 841票

氏名	投票数	地域	順位
伊藤健 いとうつよし	53	関東	1
出穂雅実 いずほまさみ	29	関東	9
岩谷史記 いわたにしき	43	九州・沖縄	○
氏家敏之 うじけとしゆき	28	中四国	10
及川穰 およかわみのる	40	中四国	4
門脇誠二 かどわきせいじ	37	中部	6
鹿又喜隆 かのまたよしたか	43	東北	○
鎌田洋昭 かまだひろあき	25	九州・沖縄	12
軽部達也 かるべたつや	26	関東	11
絹川一徳 きぬがわかずのり	39	近畿	5
佐藤宏之 さとうひろゆき	56	関東	○
笹原芳郎 ささはらよしろう	14	中部	15
沢田敦 さわだあつし	33	中部	8
芝康次郎 しばこうじろう	41	近畿	○
鈴木美保 すずきみほ	47	関東	2
高倉純 たかくらじゅん	37	北海道	○
丹羽野裕 にわのひろし	15	中四国	14
野口淳 のぐちあつし	35	関東	7
藤田尚 ふじたひさし	23	中部	13
藤野次史 ふじのつぎふみ	44	中四国	○
森先一貴 もりさきかずき	41	近畿	3
山岡拓也 やまおかたくや	58	中部	○

5. 当選者：7地区の上位得票者1名（○印）と、総得票数上位15名が当選者

以上の当選者のほか、投票数が1～3票の方が27名いました。その合計は34票です。また、近畿地区の上位2名が同得票数でしたが、選挙管理委員によるくじ引きの結果、芝会員を近畿地区上位得票者としました。

## 日本旧石器学会研究グループ 2013年度活動報告

### 1. 沖縄更新世人類研究グループ

#### ①沖縄県南城市サキタリ洞・石垣市白保竿根田原洞穴遺跡の調査研究

南城市サキタリ洞遺跡の調査区I第II層（16000～19000 <sup>14</sup>C BP）から出土した人骨2点（第3大臼歯と足根骨）と海産貝約40点について報告した。海産貝には、二枚貝（マルスダレガイ科、クジャクガイ）製貝器23点、ツノガイビーズ2点が含まれている。このうち、マルスダレガイ科の主体を占めるマツヤマワスレは、現在沖縄近海では見られない温帯域の貝である。また、2013年9～11月にかけて引き続き下層の第III層について発掘を実施した。

調査区IIでは昨年度から今年度の調査で、縄文時代前期末の条痕文土器包含層（IVC層）よりも下層（V層）から、押引文土器がまとまって出土し、共伴したカタツムリ殻の放射性炭素年代測定の結果、8000 <sup>14</sup>C BPの年代値2件が得られた。この事

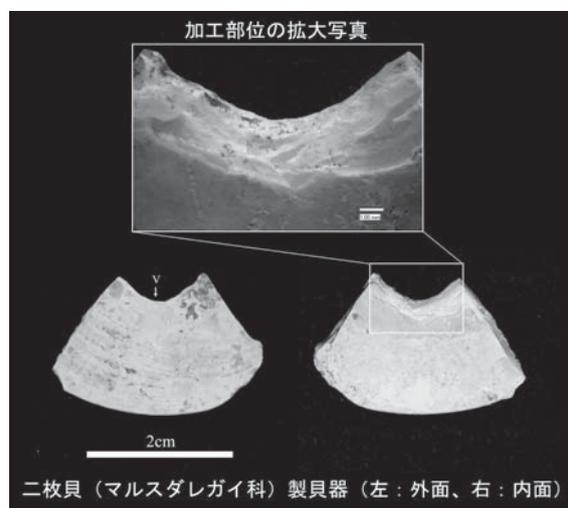


写真1 二枚貝（マルスダレガイ科）製貝器

例は、沖縄において南島瓜形文土器以前にさかのぼる土器文化が存在することを示す手がかりとなるものである。以上の調査成果については、2014年2～3月まで沖縄県立博物館・美術館にて『サキタリ洞遺跡発掘調査速報展』が開催され、一般への普及も行われた。また、昨年に引き続き白保竿根田原洞穴遺跡でも9～12月まで発掘調査を実施し、追加の人骨等の遺物が多数得られている。

## ②インドネシア・フローレス島の島嶼考古学的調査

中期更新世の動物化石や石器の産地として知られているインドネシア・ソア盆地、後期更新世（約2万年前）のフローレス原人が発見されたリアン・ブア遺跡の現地踏査を実施した。その成果に基づいて、資源に乏しい島嶼環境への先史人の適応プロセスについて、沖縄との比較研究を実施中である。

## ③成果発表

### (1) 学会発表

・山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・国木田大・海部陽介 「琉球列島における後期更新世／完新世移行期の人類とその文化」 『日本旧石器学会第11回講演・研究発表』 2013年6月

・山崎真治 「沖縄先史時代における貝仮説の再検討ー石器代替品としての貝器利用の可能性」 『第67回日本人類学会大会』 2013年11月

・藤田祐樹・山崎真治・片桐千亜紀・大城逸朗 「沖縄県南城市サキタリ洞における2012年度調査の概要」 『第67回日本人類学会大会』 2013年11月

### (2) 論文等

・山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・黒住耐二・海部陽介（印刷中） 「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡出土の後期更新世の海産貝類と人類との関わり」 『Anthropological Science (Japanese Series)』



写真2 フローレス島リアン・ブア遺跡(写真奥・洞穴壁際トレンチの深度約6mの地点からフローレス原人が発見された)

・沖縄県立博物館・美術館（2014） 『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

・沖縄県立博物館・美術館（2014） 『サキタリ洞遺跡発掘調査速報展図録』

・山崎真治・横尾昌樹・伊藤圭・国木田大・新里尚美（2013） 「沖縄先史土器の起源と南下仮説」 『九州旧石器』17：283-295頁

## 2. 南アジアの旧石器時代遺跡研究グループ

### ①南アジア旧石器時代遺跡データベースの整備

2013年度はパキスタンおよびインド北西部・中北部を中心に既公表データの収集、整理を進めた。

### ②パキスタン、ヴィーサル・ヴァレー地区遺跡群、および関連遺跡資料調査（2013年10～11月）

ヴィーサル・ヴァレー地区遺跡群について2012年度発掘調査資料および既往分布調査採集資料の計測・写真撮影・3D計測を、シャー・アブドゥル・ラティーフ大学（SALU）考古学研究室および考古学・人類学博物館と共同で行った。またバローチスターン州チャガイ丘陵遺跡群採集の中期～後期旧石器時代と推定される石器群についても計測・写真撮影・3D計測を行った。

### ③パキスタン、チャンディア地区遺跡群の踏査（2013年10～11月）

タール砂漠西縁、インダス川氾濫原との接点に立地するチャンディア地区の踏査を行い、中期・後期旧石器時代～新石器時代と推定される石器群および新石器時代の土器を採集した。

今後、砂丘とインダス川氾濫原の接点における地形発達史・古環境変遷史解明も含めた発掘調査を準備する予定である。

### ④パキスタン、ソアン川流域遺跡群の踏査、採集資料調査（2013年12月）

ハザーラ大学と共同で、学史上著名なソアン川流域遺跡群のうち、イスラマバード首都圏とパンジャーブ州の境界に位置するモルガー遺跡などを踏査、中期～後期更新統の地層が露出する露頭を確認した。また長年同遺跡群の調査を続けてきたカイデ・イ・アザム大学元教授 Dr. M.Salim を訪問し、同氏の採集資料を確認した。同遺跡群については、2014年度からの調査許可を申請している。

### ⑤インド各地出土・採集旧石器時代資料調査、ジュワラプーラム遺跡群踏査、アッティランパッカム遺

## 跡踏査 (2014年1月)

インド・デカン大学院大学において、インド各地の前期～後期旧石器時代遺跡の出土・採集石器の資料調査を行なった。インド南部ジュワラプーラム遺跡群においては昨年度に引き続き、カルナタカ大学の研究者と共同で現地踏査および出土資料調査を行った。またデカン大学およびシャルマ文化遺産教育センターの研究者の協力のもとインド南部アッティランパッカム遺跡出土前期旧石器時代石器群の資料調査、および遺跡現地踏査を行った。

## ⑥石器群の画像・3D計測データ・アーカイブの整備

東海大学近藤研究室のご協力により、同大学所蔵丸山コレクションの前期～中期旧石器時代資料の高精細デジタル画像作成、3D計測モデルの作成を進めた。また同資料の研究についてインド・シャルマ文化遺産教育センターと協力することを確認した。

## ⑦成果の普及・公開

### (1) 学会・研究会等発表

・インド考古研究会第275回例会(2013年4月6日)：野口 淳・下岡順直・G.M. ヴィーサル・Q.H. マッラー・N. シェイフ・近藤英夫「パキスタン・シンド州の旧石器時代遺跡調査：ヴィーサル・ヴァレー・プロジェクト2012」

・A UK-India British Academy International Partnership ‘Out of Africa, Into South Asia: a collaborative understanding of the earliest humans in India’ workshop 2 (2013年4月16～17日：イギリス・オックスフォード)：A. Noguchi, Y. Shitaoka, Q. H. Mallah, G. M. Veesar, N. Shaikh, H. Kondo ‘Veesar Valley: assumed Middle/ Upper Palaeolithic sites in the Thar Desert and its implications for modern human dispersal into South Asia’



写真 チャンディア地区遺跡群表面調査風景

・Symposium on “Palaeolithic of Iran” (2013年4月21日：東京)：A. Noguchi ‘Middle to Upper Palaeolithic of South Asia: chronological sequences and regional variability’

・日本地球惑星科学連合2013年大会(2013年5月19～24日)：野口 淳・下岡順直・Q.H. マッラー・G.M. ヴィーサル・N. シェイフ・近藤英夫「現代型人類拡散の「南回りルート」における地理的多様性」

・日本旧石器学会第11回講演・研究発表・シンポジウム(2013年6月15～16日)：野口 淳・下岡順直・近藤英夫「南アジアの旧石器時代：地考古学にもとづく石器群編年の再検討」

・SALU 教員・学生向け講義(2013年11月1日)

・ハザーラ大学教員・学生向け講義(2013年12月24日)

・The 2nd International Seminar on “Sindh Through the Centuries” (2014年3月24～26日：パキスタン・カラチ)：A. Noguchi ‘Between the Deserts and the River: the significance of Sindh over millions of years of incredible human history’

### (2) 刊行物等

・野口 淳・下岡順直「PJAM / パキスタン—日本考古学共同調査2012-2 ヴィーサル・ヴァレー地区旧石器時代遺跡群予備発掘調査」『インド考古研究』34: 95-100

・野口 淳「現代人は、いつ、どのようにして世界へ広がっていったのか—出アフリカ・南回りルートの探究—」『古代文化』第65巻3号、117-129頁

・野口 淳「第2回国際ワークショップ “Out of Africa, Into South Asia: building collaborative understanding of the earliest humans in India” 参加記」『石器文化研究』第19号

### (3) ウェブページ等

下記のウェブサイト、ブログを開設して情報の公開を進めている。今後、本研究グループに関するページに、遺跡データベース、石器群アーカイブを公開する予定。

・ヴィーサル・ヴァレー・プロジェクト(日本語版)ウェブサイト：<https://sites.google.com/site/veesarvally/>

ブログ：<http://veesarvalleyjp.blogspot.com/>

2014 年度総会・基調講演・一般研究  
発表・シンポジウム開催要項・プロ  
グラムのご案内

下記の通り 2014 年度日本旧石器学会第 12 回大会  
についてご案内いたします。一般発表（口頭・ポス  
ター発表）の詳細については、後日、学会ホームペ  
ージにてお知らせいたします。

日本旧石器学会第 12 回大会

会場：ルネこだいら小平市民文化会館 中ホール  
（東京都小平市美園町 1-8-5）

日程：2014 年 6 月 21 日（土）～ 22 日（日）

6 月 21 日

小平市教育委員会主催公開講演会（10：30～  
12:00） 稲田孝司「鈴木遺跡の成立と黒曜石の獲  
得（仮題）」

総会（13:00～14:20 12：30 受付開始）

基調講演（14:20～15:30） 佐藤宏之「旧石器時  
代における石材獲得と遺跡群形成（仮題）」

一般発表（15:50～17:50）

小川望「鈴木遺跡-最近の調査成果-」／中村由克  
「旧石器時代における北陸系石斧石材のひろがり」  
／及川穰ほか「長野県霧ヶ峰地域における黒曜石原  
産地の踏査」／佐野勝宏「東北地方における後期旧  
石器時代狩猟具の投射方法に関する実験研究」

懇親会（18:30～20:30）ルネこだいら小平市民文  
化会館 レセプションホール

6 月 22 日

シンポジウム（9:00～15:10）

テーマ「石材の獲得・消費と遺跡群形成」

鈴木宏行「白滝黒曜石原産地と消費地」／鹿又喜隆  
「珪質頁岩原産地と消費地」／国武貞克「関東周辺  
黒曜石原産地群と消費地」／絹川一徳「二上山サヌ  
カイト原産地と消費地」／杉原敏之「西北九州黒曜  
石原産地と消費地」／大谷薫「韓国における石材原  
産地と消費地」／コメント・パネルディスカッショ  
ン

ポスター発表

会場：ルネこだいら小平市民文化会館 展示室

日程：6 月 21 日～ 6 月 22 日

※コアタイムは 22 日 12:30～13:40

会場案内：西武新宿線「小平」駅南口下車徒歩約 3  
分。

<http://www.runekodaira.jp/access>

駐車場はありません。車での来場はご遠慮くださ  
い。

宿泊：各自でご手配下さい。小平市内にホテルはあ  
りません。久米川駅、国分寺駅周辺、もしくは都心  
でお探してください。

参加申込み：同封の葉書に必要事項を記入の上、6  
月 8 日（投函）までに事務局までお申し込み下さい。  
また、やむを得ず欠席される場合は、会則第 5 条に  
より、欠席の委任状を含め全会員の 5 分の 1 以上の  
出席をもって総会が成立しますので、同葉書下段の  
委任状に記入、押印のうえ投函願います。

中・四国旧石器文化談話会 30 周年記  
念シンポジウム「石器石材と旧石器  
社会」開催報告

中・四国旧石器文化談話会は 2013 年に設立 30 周  
年を迎えた。これを記念してシンポジウム「石器石  
材と旧石器社会」を、2013 年 11 月 16・17 日に岡  
山大学で開催した。プログラムは次の通りである。  
第 1 部 各県の様相 大川泰広（鳥取県）／伊藤徳  
広（島根県）／小嶋善邦（岡山県）／沖 憲明（広  
島県）／小南裕一（山口県）／小野秀幸（香川県）  
／原 芳伸（徳島県）／森田尚宏（高知県）／池尻  
伸吾（愛媛県）

第 2 部 石材と技術 絹川一徳「瀬戸内技法の成立  
とその背景」／森先一貴「瀬戸内技法の拡散と伝  
播」／三好元樹「湧別技法の流入／伝播」

第 3 部 石材原産地と消費 沖 憲明「冠山産安山  
岩」／沖野 実「赤色珪質岩」

第 4 部 石材利用の時期的変遷 伊藤徳広「後期旧  
石器時代前半期」／氏家敏之「後期旧石器時代後半



写真 会場風景

期」／光石鳴巳「石材利用から見た中四国地方の細石刃石器群」

第5部 石材利用の地域性 藤野次史「中・四国地方における石器石材利用の時期別動向と地域性」／佐藤宏之「関東地方における石器石材利用の時期別動向と地域性」／荻 幸二「九州地方における石器石材利用の時期別動向と地域性」

今回のシンポジウムは、石器石材について多様な切り口から議論することで、旧石器社会を立体的に捉えることを目的に、テーマ別の5部構成とした。

第1部では、基礎データの整理・集成を行い、石材利用状況の把握とその共有化を図った。第2部では、石器石材と石器製作技術の関係性をテーマとし、石材による石器製作技術の規定性や、集団移住による石材転換の問題を検討した。第3部では、中・四国地方に産出する石材について、原産地遺跡の様相や消費地での利用形態について議論した。第4部では、時期別に石材利用の様相を検討し、通時的特徴や時期的に限定される特徴の解明を試みた。第5部では、第4部までの議論を踏まえ、中・四国、関東、九州の各地域の石材利用の特質を、主に行動論・社会論的観点から比較・検討した。

今回のシンポジウムではテーマを幅広く設定したため、消化不良の論点も多かった。しかし、議論を通じて問題意識を共有し、今後の研究の方向性を確認しあうという役割は果たせたと思う。

なお、シンポジウム予稿集・資料集を、1部3,500円で販売している。購入希望の場合は中・四国旧石器文化談話会事務局（北浩明）宛てEメールで問い合わせいただきたい（[chuushikyusekki@yahoo.co.jp](mailto:chuushikyusekki@yahoo.co.jp)）。（北浩明）

## 関連学会情報

九州旧石器文化研究会第40回記念大会「九州旧石器時代の人類文化と遺跡群の成り立ち－石器組成・技術・石材・遺構からみた九州旧石器文化の特質－」

九州旧石器文化研究会は、40回の節目を迎えるにあたり、これまでの研究の蓄積を踏まえつつ、九州地方における旧石器時代遺跡群の成り立ちを各地域の石器文化から捉えるシンポジウムを企画しました。橘昌信氏による講演、九州・沖縄の研究者11名による研究発表・討論、資料見学を実施します。

開催日：2014年9月13日（土）・14日（日）

会場：熊本市国際交流会館（熊本県熊本市）  
なお詳細は、ハカタントロプス（福岡旧石器文化研究会）HPに掲載しますので、ご確認ください。

## お知らせ

### 会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されているため、会費は原則前納とさせていただいております。同封の払込取扱票を用いて、2014年度分の会費の納入をお願いいたします。また2013年度以前の会費を未納の方々につきましては、該当年度分の会費をも納入いただきますよう、お願いいたします。年会費は5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局にて簡単に手続きいただけます。

なお転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等でご連絡ください。

### メーリングリストの運用について

既に御案内のとおり、メーリングリストの運用を開始しました。これは、学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものです。

まだ登録していない会員諸氏におかれましてはメーリングリストの御登録ください。メールアドレスを、総務委員の山岡のメールアドレス（[takuyayamaoka@yahoo.co.jp](mailto:takuyayamaoka@yahoo.co.jp)）までおしらせください。速やかに御利用できるようにします。強制するものではありませんが、御協力をお願い申し上げます。

日本旧石器学会ニュースレター 第26号  
2014年5月12日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会  
谷 和隆・沖 憲明・高倉 純

発行：日本旧石器学会

事務局：〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836  
静岡大学人文社会科学部社会学科山岡拓也研究室

E-mail [jpra\\_2003@ay.em-net.ne.jp](mailto:jpra_2003@ay.em-net.ne.jp)

HP <http://palaeolithic.jp/index.htm> Ihintrus